

# 池 贄

前

シテ 旅人

ワキヅレ 宿主

ワキ 神主

トモ 神主従者

ツレ（母） 旅人の妻

子方（姫） 旅人の娘

後

シテ 日の御子の神

地は 駿河

季は 雑

「立つ旅衣はるぐと。く。東の奥に急がん。

「かやうに候ふ者は。都方に住居仕る者にて候。さても某如何なる宿縁にや。次第々々におとろへ。都に住居も叶ひ難く候ふ間。東の方に知る人の候ふを頼み。妻子を伴ひ只今東の奥へと急ぎ候。

「都をば。鳥が鳴く音に立ち出で。く。東の旅に今日こそは。逢坂の関路ふく。嵐の風は松本や。矢橋の渡り程もなく。近江路過ぎてゆく旅の。

憂き身の終り如何ならん。く。唐衣きつゝ馴れしと詠じけん。三河に渡す八橋の。くもでに物を思へとや。猶行末も遠江。果なき旅を駿河なる。吉原の宿に着きにけり。く。

「旅の者にて候ふ宿を御借し候へ。

「宿と仰せ候ふか此方へ御入り候へ。如何に申し候。旅人は何処より御下り候ふぞ。

「是は都より人を頼みて東へ下り候。

宿主「あら痛はしや候。又ひそかに申すべき事の候。今夜此宿に御泊り候ふ人は。明日富士の御池の贄の御鬘に。御出でなくては叶はぬ事にて候ふ間。御痛はしく存じかやうに申し候。夜の内に此宿を御通り候へ。是は我等が内証にて申し候ふぞ。疾うく御立ち候へ。」

シテ「あら嬉しや候。さらば急いで罷り立ち候ふべし。」

ワキ「如何に誰か有る。」

トモ「御前に候。」

ワキ「今夜此宿に旅人が三人とまりて候ふが。夜の内に立ちたるよし申し候。急いで留め候へ。」

トモ「畏つて候。如何にあれなる旅人御留り候へ。」

シテ「此方の事にて候ふか。」

トモ「中々の事。」

シテ「何とて御留め候ふやらん。其謂が承り度く候。」

トモ「げにく御存じなきは御理にて候。当所に於て毎

年富士の御池贄の御神事御座候。即ち今日に相当りて候ふ間。御神事に御逢ひ候へ。

シテ「委細承り候。譬へば其所の神事などをば。其郷に孕まれ。又は其生れ氏人などこそ御神事に逢ふことにて候へ。行方も知らぬ旅人が在所に泊りたればとて。御神事に逢ふべき事更に心得がたう候。

トモ「いや／＼如何に仰せ候ふとも叶ひ候ふまじ。

ワキ「なふ／＼暫く。げにも其子細を御存じ候ふまじ。

よく／＼御聞き候へ。昔よりこの吉原の宿に。今夜とまりたる旅人は。何れも／＼今日の池贄の御神事に御逢ひ候ふぞとよ。急いで御帰りあつて。そと御神事に御逢ひ候ひて。めでたうやがて御帰り候へ。

シテ「委細承り候。以前も申し候ふ如く。其所の神事など、申す事は。其生れが郷内の人などこそ執り行ふべけれ。何くともなき旅の者の。此池贄の御神

事に逢ふべき事。心得がたく候。

ワキ「さてこそ大法とは申し候へ。

シテ「げにく／＼尤にて御座候へども。平に公の私を以て。

我等が事をば御免あらうずるにて候。

ワキ「さては昔よりの大法を。貴方一人して御破り候ふな。

シテ「暫く。其儀にてはなく候。此上にて候ふ程に。恥かしながら真直に語り申し候ふべし。是は都の者

にて候ふが。如何なる宿縁にや某が代となつて。事の外けいくわい仕り。世路をも営みがたく候ふ程に。東の方に知る人の候ふを頼み。妻子伴ひ下る体にて候へば。平に通して賜はり候へ。

ワキ「げにく／＼歎き給ふは理りなれども。昔より今に至るまで。親を取られ子を取られ。妻や夫の別れをする者其数を知らず。よし／＼前世の事と思召し。御池へ出でさせ給へとて。

カル「神主宮人すゝむれば。

母姫二人

「いかゞはせんと母や姫は。父の袂にすがりつけば。

シテ

「父もいひやる方もなく。只茫然とあきれ居たり。

ワキ

「かく休らひて叶ふまじと。三人が中を押し分けて。

トモ

「先に追つ立て行く有様。

ワキ

「物によくよく譬ふれば。

地

「中有黄泉の罪人の。呵責のせめもかくやらんと。

思ひ白露の。消ゆるばかりの心かな。是かや屠所

に趣ける。羊の歩み程もなく。涙と共に行く程に。

富士の御池に着きにけり。く。

ワキカル

「さて富士の御池に着きしかば。神主を始め禰宜や

乙女。神樂をのこに至るまで。御池のあたり座列

せり。

地

「贄の御鬘は一つなれども。もし我にてや有るべき

と。思ふ人数は数百人。

ワキ

「胸をいだき手を握り。

地「色を失ひ。

ワキ「肝を消す。

地「たが身の上と白雪の。深くぞ頼む氏の神。守らせ給へと手を合せ。祈誓申しけり。

ワキ詞「神主やがて立ち上り。く。御鬘の箱の蓋をあけ。

諸人に取らせ数を見る。

地「数の人々残りなく。御鬘を取りて立ち帰り。披きて見れば一の鬘。なきは喜ぶその中に。因果非運

は是かとよ。旅人の娘取り当り。臥しまろびてぞ泣き居たる。く。

ワキ詞

「旅人は三人有るか。鬘は二つ出でゝ有るぞ。あの旅人の中に。今一つの鬘を出だせと申し候へ。

トモ

「畏つて候。如何に旅人へ申し候。三人御座候が鬘は二つ出でゝ候。今一つの鬘を御出だしあれと神主殿より仰せられ候。

シテ

「いや早悉く参らせて候。

トモ「いや幼い人の鬩が出で申さぬげに候。さればこそ是に候。や。しかも一の鬩にて候ふよ。」

母「げになふ是は一の鬩にて候ひけるぞや。悲しやな都の内を迷ひ出で。知らぬ東に下る事も。御身の人にもや成すと思ひてこそ。物憂き旅にも思ひ立ちたれ。さて御身に離れては。母は何となるべきぞや。あら浅ましや候。」

姫詞「なふさのみな御嘆き候ひそ。此鬩を母や父御の取

り給はゞ。みづからは何となるべき。さりながら只今別れ参らすべき。御名残こそ惜しう候へ。」

シテ「げにくけなげなる事を申し候ふ物かな。二人の親何れにても取り当りたらば。姫は何となるべきと。孝行なる事を申し候。なふく此貴賤群集の中にて。さのみな御嘆き候ひそ。同じ親にて候へば。何れも嘆きは劣るまじく候へども。始めより此御鬩に参るよりして。三人が中に一人取り当ら



うずると覚悟仕りて候ふ程に。某はちつとも嘆くまじく候ふよ。

母「わらはも左様には思ひ候へども。是は余りの事なれば。現とも更に思はれず。

シテ「父も弱げを見えどとて。心づよくは言ひながら。さすが親子の中なれば。忍ぶ涙はせきあへず。

母「こはそも夢か現かと。姫に取りつき悲しめば。

シテ「父諸共にすがりつき。

シテ母

「さても親子の契りとは只今ばかりの対面なれば。父母をもよく見よ。姫をもいま。限りと見ればかきくれて。いとゝ涙の増鏡。

地

「富士の煙の上もなき。思ひや我に知らるらん。げに別れこそ悲しけれ。

上歌

「歎きには。如何なる花の咲くやらん。く。身となりてこそ思ひ知らるれと。詠ぜし人の心も。今身の上とあはれなる。貴賤群集はこれを見て。げ

に理りや父母の。思ひはさこそと夕露の。袖をしをりて諸共に。嘆きあひたる気色かな。く。

(中人)

ワキカゝル

「既に其期になりしかば。神主宮人残りなく。御池のあたりに並み居たり。

地

「さてかの船には御幣をかざり。五重の荒菰その上に。贅の乙女をすゑ置きたり。

ワキ

「神主御幣おつとつて。既に祝詞を申しけり。謹上

再拝。敬つて白す大日本国。駿州富士の郡下方の郷。大蛇の御池にして。贅の乙女を供へ奉る処なり。仰ぎ願はくは。青蓮の御眼あざやかに。棹鹿の八つの御耳を振り立てゝ。聞き入れ納受垂れ給へ。

地

「や本地覚王如来。寂光の都を出でゝ。

ワキ

「かりに垂跡とあらはれ。一業所感の迷ひの衆生を。救はん方便の殺生。

地「有難けれども願はくは。池贄をとめて国土の人民の。憂ひを助けてたび給へ。

地「あれく見よや御池の面。く。さゝ波立てゝ水うづまき。風吹きあれて朱の赭舟。おのれと沖にゆられ行けば。父母あれはと舟を慕へば。姫も互に名残を惜しみ。招けば招く風情はさながら。松浦佐用姫かくやらんと。汀にひれ臥し泣き居たり。

後ジテ「抑是は。富士権現の御使。日の御子の神なり。さても此たび贄の御鬘を。旅人の娘取り当り。父母あまりの嘆きにや。大願さまぐあり。今よりしては池贄をとめて。国土安全になすべしと。

地「神託あらたに聞えしかば。く。曇る空晴れ風静まつて。白浪は平波となつて。池水の面悠々たり。シテ「譬へば其むかし。出雲の国や簸の川上に。大蛇の池贄あつて。稻田姫を取らんとせしに。素盞鳴の

尊は居まして。剣を抜いて忽に。毒蛇の八つの頭を。皆いち／＼に打ち落して。それより池贄とゝまりけり。其如くに此悪蛇をも。富士権現の御罰に依つて。今より池贄とゝまるべしと。告げ知らしめて此舟を。もとの汀に漕ぎよせて。姫を二親に与へつゝ。さて日のみこは白雲に。かかやき昇るや富士の嶽。雪や煙に立ちまぎれ。雪や煙に立ちまぎれ内院に。神はあがらせ給ひけり。